

報告1

朝鮮半島はどこにゆくのか

小 此 木 政 夫

ただ今紹介にあずかりました小此木でございます。どうぞよろしくお願いいたします。私は、朝鮮半島の問題についてお話ししたいと思います。ということになりますと、最近のいろいろな物騒な出来事がすぐ頭に浮かぶのではないかと思うんです。ミサイル試射だとか、核実験だとかという問題です。これはどうなっているのか。あるいは、これからどうなるんだろいかということなのですが、そこに踏み込む前に、そもそもなぜ彼らはそんなことを一生懸命になってやるのだろいかというあたりから、できるだけ分かりやすくお話ししたいと思います。

ちょうど二〇年ほど前に冷戦が終結しましたが、そのときに、ソ連や東ヨーロッパの国々は社会主義体制を捨てて、資本主義に転換してしまいました。体制転

換を行ったわけです。中国はどうかといいますと、市場経済を導入したのだから半分だけ資本主義の要素を取り入れて、あとはできるだけ社会主義体制を維持しようとしたんだらうと思います。ベトナムやキューバも似たようなことをやっているわけです。

たまたま去年の夏に、私は観光旅行でベトナムに行きましたが、びっくりしましたのは、飛行機を降りてからホテルに滞在して、そしてまた飛行場に帰るまで、ほとんどベトナムのドンに替える必要がなかったことです。ホーチミン市のレストランでは、ドンとドルとが二重に表記してあって、何かを注文してもそのままドルで支払うことができました。ベトナムはもう資本主義なんだなと思った次第です。

そういった国に比べますと、ほとんど唯一と言って

いいのでしようが、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）だけが市場経済を受け入れることなく、社会主義政治経済体制をそのまま維持して、今日までやってきているわけです。それが今日のような状態を招いていると考えていいと思います。つまり、何とか生き残ろうとしたときに、彼らは体制改革に手をつけるのではなくて、ミサイルや核兵器の開発を一生懸命にやったのです。

目的は「生き残り」だったが、ほかの国のように資本主義体制に転換できない大きな理由がございました。北朝鮮が資本主義になったら、韓国に勝てっこないわけですから、いずれ吸収されてしまう。こういう悪夢を捨て切れないのです。ですから、そういうことにはならない担保のようなものをミサイルや核兵器によって確保したい。その上でなければ市場経済を受け入れることができないという状況であったのだと思います。それが今日まで続いてきているわけです。

目的が生き残りであって、手段が核兵器やミサイルであるということは、非常に簡単に理解できると思います。それから、彼らが核やミサイルの開発に着手し

たのは、要するに韓国との体制競争に敗れたからです。特に経済面での競争に敗れたからです。それを象徴していたのが、ベルリンの壁が崩壊する前の年にあったソウルオリンピックです。

つまり、北朝鮮は戦後長らく続いた南との体制競争に敗れたあと、その直後に冷戦が終結して、社会主義陣営が崩壊していくという「二重の敗北」を喫した国であったということです。当時、多くの人たちは、この体制はもうもたないのではないかと考えたのです。特に、その後金日成主席が亡くなりましたし、二年連続の水害、三年目が洪水などということがありました。また、それ以前に社会主義的な貿易ができなくなってしまったという痛手もありました。社会主義的な貿易というのはバーター取引のことを言ったつもりなんです。ソ連から小麦が入ってこない。

食糧危機が発生いたしました。そのころは本当にあの体制がいつまでもつのだろうかと考えられたわけです。しかし、辛うじて生き延びて、ミサイルと核開発でアメリカを含めて世界を挑発するようなことを試みているわけです。彼らがやっていることがアメリカを



小此木政夫 法学部教授

怒らせているという指摘がありますが、その通りなのです。わざと怒らせているんです。

アメリカの一番嫌がることをやって、注目を引きつけて、北朝鮮問題というのは小さなローカルな問題じゃないんだ、もっと大きな問題なんだから、オバマ政権は正面から対応してくれなきゃ困る。高いレベルの交渉がしたいというのが、実は彼らの主張なのです。

そんなわけで、いくつかのことが言えると思います。が、原因は今申し上げたように体制競争での敗北とか、東側の陣営の敗北にある。目的は「生き残り」であり、手段がミサイルや核兵器の開発です。最近の核実験に関しても、ミサイルの実験に関してもそうですが、さ

らに細かく言えば具体的な目標が三つあると思います。

一つ目は抑止力を高めるということです。何といってもミサイルや核を持つていれば、あの程度ではアメリカにとつてどれほどの脅威なのかと思いますが、韓国や日本にとっては大きな脅威です。彼らは一生懸命、核やミサイルを完成させようとしている。あるいは、アメリカに届かなくても韓国や日本をその脅威の下に置こうとしているわけです。

二つ目は、こういった努力を通じて国内的な団結を強化するという面がございます。最近の一連の挑発は、要するに後継者問題と関係しているのではないかという解説が行われております。それは、金正日総書記の健康不安という点から言えばその通りだと思います。早い時期に後継者を指名して、そしてさらにこの体制を維持するためには、国内の団結が必要だということです。

しかし、今回の核実験での最も重要な目標は、やはり対米交渉能力を高めるといことですね。彼らは先ほど申し上げたように、「生き残り」のためにアメリカとの関係の正常化や米朝平和協定が必要だと考えて

いるようで、そういったものをオバマ政権から勝ち取るために、ある種のデモンストレーションをしていると考えると三つ目の目標が分かるだろうと思います。

そういった三つの目標のいずれとも関係しているわけですが、安保理事会の制裁が行われれば、それに對抗して挑発行為を繰り返すという形で、デモンストレーションを継続するのではないかと思われます。そして、最終的には、本当に核兵器の開発を成功させるために努力しているのです。

しかし、そういったことをやっているわけですが、あらためて冷戦が終結したときの二〇年前に戻って考えてみると、実は根源的な矛盾というのは経済の破綻にあったわけですから、したがって変な言い方ですが、核兵器が完成しても経済を立て直すことができない、あの体制が生き残ることはできないのです。根源的な矛盾というのはそこにあるのです。

ミサイルや核開発によって生き残ろうとするということは、結局自分たちが達成しようとしている目的と、そのための手段との間に、大きなミスマッチがあるということの意味しています。私はテレビで解説すると

きには分かりやすく、彼らがやっていることは「ピストルを突きつけてプロポーズをする」ようなやり方だと申し上げます。これは本来なじまないやり方なのだけれども、しかし彼らはこの方法しかないと考えているのです。

そのところを理解しめんと、ピストルを突きつけられた方は、プロポーズをされているとは誰も思わないわけですから、そのミスマッチが事態を混乱させてしまいます。意思の疎通というものが不可能になっているということだと思ふのです。

あまり時間がございませんので、さらに先の話に、やや乱暴ですが進めたいと思います。なぜ北朝鮮が今年になってから、急にこんなに挑発を繰り返すのかということに関していうと、先ほど申し上げたようなこと、つまり金正日の健康問題が去年の夏以来表面化していますから、やはりこの問題があるのだと思います。それ以外になかなか説明できないですね。つまり、時間という資源が彼らにとつて非常に貴重になっている。今までは、例えばブッシュ政権が、あと残り何年だからということをやっていたわけです。ブッシュ政権

八年のうち六年ぐらい強硬政策をとっていたけれども、北朝鮮はその間に約四〇キロもプルトニウムを作ってしまった。残り二年でそれを回収できないから、急に政策を変更して直接対話に応じるといようなことで、時間の流れが、必ずしも彼らに不利に動いていたわけではなくて、むしろブッシェ政権にとって不利に作用していた。しかし、今の状況はちよつとそれとは違ひまして、オバマ政権はまだこれから四年あるし、さらに四年あるかもしれない。北朝鮮が金正日の健康不安のために、二〇一二年問題などと言っていますが、数年のうちにある程度の後継体制をつくって、生き残体制を固めたいのだということであれば、もう時間がないではないかという状況です。彼らの瀬戸際政策が本当の瀬戸際政策、すなわち捨て身の瀬戸際政策になりかねないという非常に危険な側面がございます。そのところの危険の度合いが、一般にはあまり理解されていらないと思います。

もちろん、露骨な形で挑発されたオバマ政権は圧力に屈するような形で交渉はできませんから、ブッシェ政権と違って、今のところ制裁をやりながら、北朝鮮

の要求を無視する、あるいは放置するという政策をとっています。核実験をやめさせようと思つても、誰も止められないのだから、やるならどうぞやってくれ、我々は、だからといって交渉に応じるようなことはしませんという形で、ブッシェ政権の最後の二年間との差別化を図っているわけです。

そんなわけで、今の状況は、そうされればされるほどいらいらして挑発をエスカレートする北朝鮮と、どこまでも無視し続けようとするアメリカの対決という構図になっています。実は、いくら実験をやっても無視されると、された方は困ります。北朝鮮のような小さな国は、核実験を続けているだけで大変なコストです、ICBMを打ち上げるのも大変です。

したがって、核実験をやれば、その分、持っているプルトニウムが減っていくんだ、より安全になるんだというぐらい鷹揚に考えて、無視できるかどうかということ、そこまで本当に無視できるかどうかということと、逆に北朝鮮の方は今、申し上げたようなことですが、いつまで挑発が続けることが本当に可能なんだろうか、国力の限界がやっぱりあるのではないかとい

うことの「せめぎ合い」、ある種の膠着状態のようなものが、これからしばらく続くのではないかと思えます。

ただ、そうは言っても、北朝鮮もアメリカも軍事的に対応するわけにはいきませんから、そういう意味では、いずれどこかの時点で交渉に入らざるを得ません。どういう形で自分たちがより強い立場から交渉に入ることができるといえることが考えられているんだろーうと思います。中国は北朝鮮を大きく混乱させるような強い制裁には踏み切らないだろうと考えています。

そんなことで短期的に見ますと、秋ぐらいまでが一つの区切りであり、そしてもうちょっと長い目で見ると二〇一二年ぐらいまでの三〜四年がいま一つの区切りになると思います。ですから、これから四〜五年ぐらいが朝鮮半島で一つの時代が終るときかなと見えます。どういう形で決着がつくかが問題でして、混乱が大きくならない形で、平和が維持される形で、交渉によって決着がつくことももちろん望ましいわけですが、そうしなければぶんこの地域、あるいは東アジア全体に明るい展望が開けてくるのではないのでしょうか。し

かし、そうならない可能性もあります。

最後に一つだけ申し上げますが、講演会などこういう質問を受けるんです。北朝鮮は本当に核兵器を放棄する気があるんでしょうか。ないんだったら交渉してもしょうがないではないかという質問です。それが、北朝鮮に対する強い対応を正当化する一つの論理にもなっているように思います。それに対して私が申し上げるのは、「体制の生き残り」と核開発が結び付いているというのが、北朝鮮の場合の非常に大きな特徴であるのだから、論理的には、目的が達成されれば手段はいらなくなるということです。

だけれども、実際に目的が達成されるということはなかなか考えにくいというのも、また事実なのです。もし、目的が達成されなかったらどうなるのか。そのときは非常に恐ろしいシナリオがあり得ます。だから、そのあたりのことをもう少し真剣に考え、彼らの核開発のレベルをできるだけ低く抑えておく方がいいのではないのでしょうかというのが、私の答えです。どうもありがとうございました。

(司 会)

小此木先生、どうもありがとうございます。新聞報道などだけで見ておりますと、北朝鮮はよく「ならず者国家」などと言われて、わけが分からない行動をとると思われがちですが、今日のお話のように冷戦構造あるいは資本主義体制、社会主義体制、そういう大きなグローバルな枠組みの中で説明していただきますと、北朝鮮なりの論理というものが非常に明晰に、よく分かっただと思います。それでは、次に我部先生にお願いいたします。